



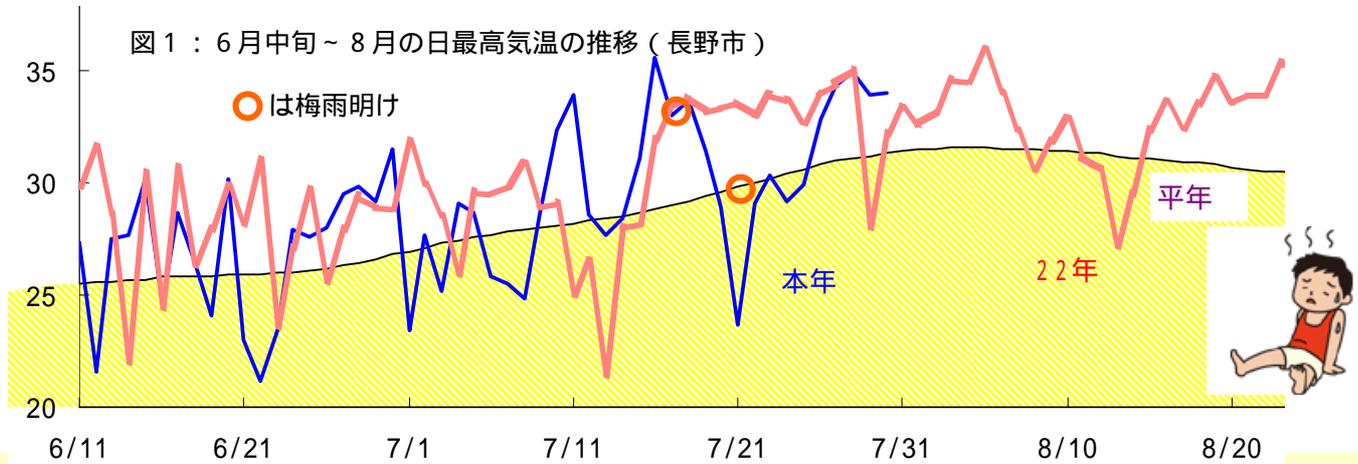
果樹類の日焼け軽減対策について

平成24年7月31日
農業技術課

気象経過

24年の梅雨明けは7月17日で、平年より4日早く昨年より8日遅くなっています。気象庁は、8月1日からの約1週間はかなりの高温になると予想しています(7月24日発表)。

記録的な猛暑となった平成22年は、7月17日の梅雨明け後から農作物・家畜に様々な影響・被害が発生し、なかでも果実の日焼け(右写真:りんご)については、梅雨明け直後の7月中旬頃から目立つようになり、りんご、ぶどうなど被害程度の大きい品目では減収の原因となりました。



果樹類の日焼け軽減対策

データ: 気象庁気象統計情報

(1) 樹体の対策

主枝や垂主枝等、骨格枝の背面部、特に北~東方向の骨格枝は日焼けが発生しやすくなります。徒長枝は全て切らずに間引くか、新梢基部を30cm程度残す等して、「日除け」枝を設けます。

葉がない部位には、白塗剤、わら、段ボール等で日除け対策を講じます。

(2) 果実の対策

新梢整理に際しては、南西方向の樹冠外部の切除量を加減するとともに、除袋と葉摘みの時期をずらすなどして、日焼けが発生しないよう配慮します。

りんご等の着色管理に際しては、日が当たる部位の葉摘みを一度に強く行なわず、樹冠外周部の葉摘みは控えます。葉摘みや玉回しは午後から夕方にかけて行うことで、日焼け果の発生を軽減できますが、玉回しの角度が大きいと日焼けを生じやすいので注意します。

ぶどうは、日焼け軽減のため袋かけと笠かけを併用します。高温時は、笠かけを先行して行います。

ももの日焼けが心配される場合は、除袋をする2~3日前に袋の尻を破り、「馴らし」を行ってから除袋をします。ピーチ袋等、ワックス袋は日射により高温障害が発生する可能性があるため、高温が続く場合、袋のすそをめくる、袋を外すなどして障害を未然に防ぎます。

土壌水分が不足すると、樹体の蒸散量が減り、温度が上がりやすくなることから、日焼け果の発生を助長します。かん水は、原則として少量多数回とし、土壌が乾燥しすぎる前に行ってください。

また、土壌の乾燥防止のため、樹冠下にわら等のマルチを行います。

被覆資材を用いたりんご果実の日焼け軽減技術について

平成22・23年夏、被覆資材を用いたりんご果実の日焼け軽減試験（調査：松本農業改良普及センターほか）において一定の効果が確認されたので、実施の方法や留意点を以下にまとめました。

（1）資材

試験では「サンサンネット」（遮光率6%）を用いました。寒冷紗（遮光率20%以上）でも代替可能ですが、その場合はできるだけ遮光率の低い（白色）資材を選択してください。

（2）設置方法

被覆資材は、樹冠上部に設置するとより効果的（写真上）です。

上部への設置が困難な場合、列の片側にカーテン状に垂らすように設置します（写真左）。この際は、ほ場が南北列ならば西側、東西列ならば南側の高温になりやすい側に設置し、作業に際してはアイクリップ（写真右）のような資材を用いると便利です。なお、カーテン状に設置する際の資材費は、10a当たり8万円程度となります。



（3）設置の時期

果実への日焼けは、早生種だけでなく中晩生種にも発生しますので、品種を問わず、可能な園地では早急に設置してください。発生が多い品種は、「つがる」、「秋映」、「シナノゴールド」等です。設置期間は、高温（最高気温34度程度以上）の危険がなくなる9月上旬頃までとします。

遮光程度の低い資材（遮光率10%未満）は、収穫期まで被覆しても問題ありませんが、カーテン状に設置した場合は作業の邪魔になるため注意が必要です。

（4）設置上の留意点

カーテン状に設置、除去する際は、果実の落果に注意してください。特に「シナノゴールド」は果柄が硬く折れやすいので注意が必要です。

被覆資材は風の影響を強く受けるので、強風時には一か所にまとめたり、事前に除去します。特に、編み目の細かい資材を利用する場合は注意が必要です。